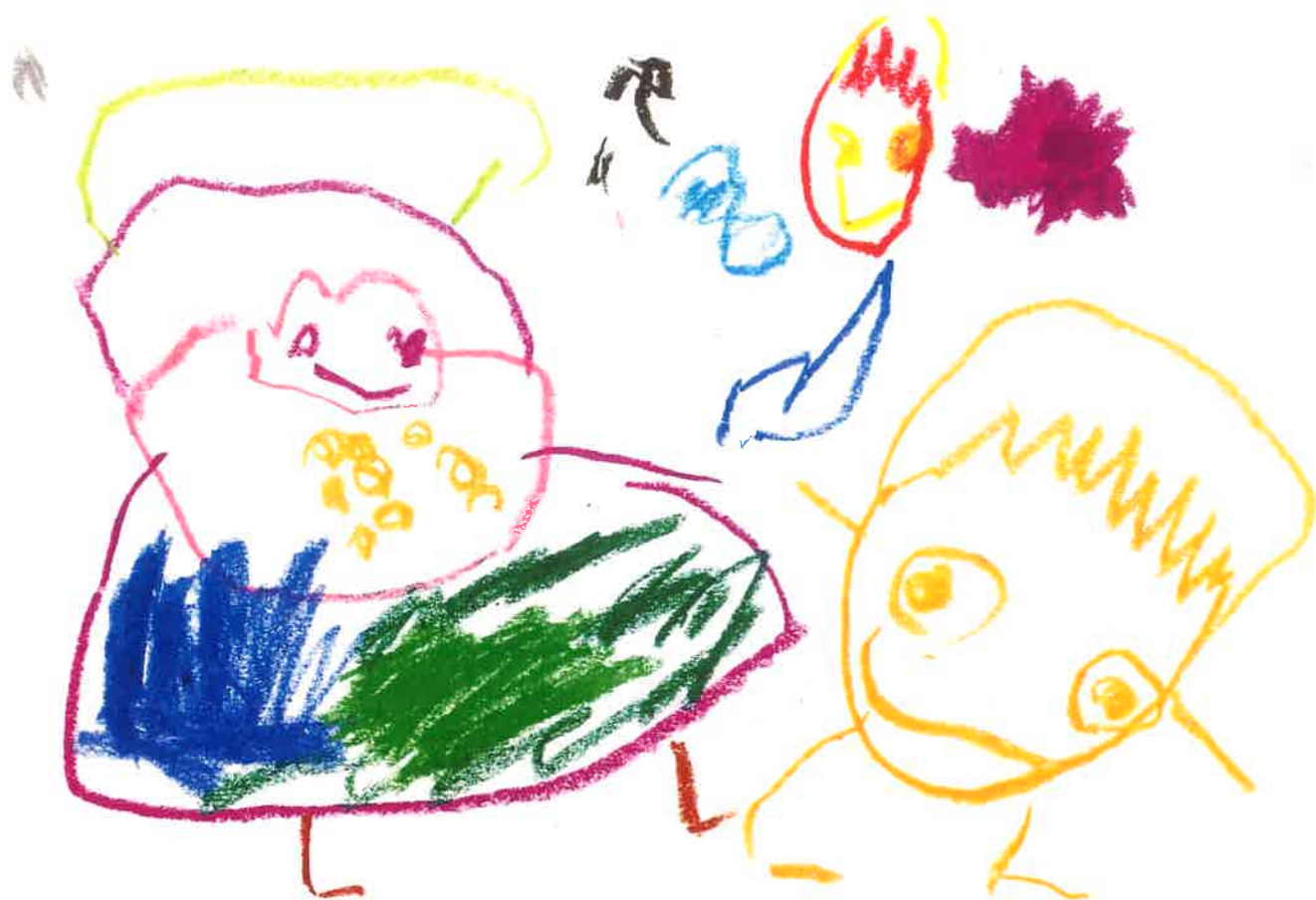


2024年度

輪になって

第45刊



●特集：保育者の葛藤や伝えたい思いなど

●保護者からの寄稿～みんなの子育て～

「輪になって」 第45刊 目次

●はじめに	-----P1
●統合保育(インテグレーション)と包括的保育(インクルージョン)	-----P2
●『支援教育の現場から』	-----P3~4
●「子育ての中で一番悩んだこと」(安家 周一)	-----P5
●「カウンセラーとのつながり。もっと身近に感じてもらえるように」 (公認心理師・臨床心理士 久司 万里子)	-----P6

《保護者からの寄稿①》

●みんなの子育て	-----P9~10
----------	------------

《特集:あけぼの職員の特集①》

●「女性の中で戦う男性職員」(宇和田 修一)	-----P13
●「過程を大切にしたあけぼのの行事とは」(柴田 弥生)	-----P14
●「長時間保育からかぞくのじかんへ」(柴田 祐加)	-----P15
●「幅広い年齢層との出会い」(佐久間 志保)	-----P16

《保護者からの寄稿②》

●みんなの子育て	-----P19~22
----------	-------------

《特集:あけぼの職員の特集②》

●「人が育つということ」(渡邊 聖也)	-----P25
●「縁の下での力持ち」(岡 優夏)	-----P26
●「おとなも子どもも みんなで“かぞく”！」(岡田 御前)	-----P27
●「保育者経験があっても子育ては難しい～周りとの繋がりで楽しむということ～」 (宮脇 和華)	-----P28
●「うちの子、なかよくしてますか？」(宮脇 知紘)	-----P29
●「だんごむしグループ保育における願いや葛藤」(玉井 友紀)	-----P30

《保護者からの寄稿③》

●みんなの子育て	-----P33~35
●「ありがとうインクルーシブ保育～特別じゃなくてフツー～」(安家 匠)	----P37
●「私らしくあるために」(影山 佳代)	-----P38

《『輪になって』を読んで…寄せられた感想》	-----P41~42
-----------------------	-------------

《編集後記》	-----P43
--------	----------

はじめに

この冊子は、当園が昭和38年より続けている「障がい児の受け入れ」と「包括的保育」についてその保育の実践や、保護者の我が子への想いを綴り、広く障がいとそれに関わる人の正しい理解と受容を図るべく作られてきました。そして、当園の障がい児学級「ちゅーりっぷ組」に在籍している子の保護者から毎年原稿を募り、実名で掲載していました。身近な包括的保育の現状を垣間見ることから共に育ち合う大切さを伝え、理解を呼び掛けることを編集方針としていました。

しかしながら、近年子どもとその保護者を取り巻く現状として、母親の子育てへの不安感の増大、孤立化、幼児・児童の虐待といったことが急速的にクローズアップされてきています。子どもを抱えるすべての保護者にとって、子どもや子育てについて悩んだり追い詰められたりといった現状が、身近な社会問題としてみえてきました。

子どもの障がいに関わらず、一人ひとりが心の中に抱えている正直な気持ちや悩みなどを綴りあうことで、子育てに関わる人たちになんらかの示唆やアイデアを提供し情報交換のきっかけとなればと、毎年視点を変えて編集しています。保護者の方の子育ての奮闘ぶりや私たち保育者の保育現場での泣き笑いがそこに繰り広げられ、あけぼのが考えるインクルーシブ保育に対する、様々な想いが盛り込まれています。

大まかな構成としては、各ポジションのリーダーが保育の中での葛藤や伝えたい思いをテーマに作成した誌面と、子どもや子育てにまつわる声を保護者や保育者から集めた手記があります。

なお、近年こうした個人情報の取り扱い、プライバシーの尊重ということにも慎重さが求められるようになってきました。お寄せいただいた原稿や、私達の文章にも、クラスやご家族のことを含め個人的な内容が含まれています。私達は、それを認識しながらも赤裸々に文章化して綴っておきたい強い思いと意志があります。ですから、それが誰であるかを推測してもらいたいからでは決してない、ということをこの冊子を手にした皆様には、くれぐれもご理解いただきたいと思います。

誌面は読みやすくなるよう各保育者が工夫を凝らしています。包括的保育を含めた子育てに関わる情報発信誌「輪になって」としてこれからも続けていきたいと思えます。

【なかま】の表記について

あけぼの幼稚園では、クラスのことを【なかま】と呼んでいます。この冊子では【クラス】の表記で統一しています。

編集委員

統合保育（インテグレーション）

包括的保育（インクルージョン）

昭和38年当時、障がいを理由に幼稚園や保育所、学校に入ることが出来なかったことが当たり前だった時代、近所に住む脳性麻痺の障がいを持つ女兒を初めて受け入れたことが、障がい児と健常児が共に生活する取り組みの始まりでした。

当時は豊中市立幼稚園や保育所でもそのような取り組みは試されておらず、一般の方々にも理解が及んでいなかった時代です。保育の現場では困惑が広がり、あけぼのでさえ「あの子がいるからうちの子どものクラスは遅れをとっている」に象徴されるような、保護者間の様々な偏見、思い違いや試行錯誤があったと聞き及びます。小学校でも、体育館の隅っこに特殊学級という呼び名で、障がい児学級が設置されていた頃です。

当時、健常と障がいという異質な子どもを合わせて保育するという意味合いから「統合保育／教育（インテグレーション）」という言葉が一般化し、私達もその言葉を使ってきました。時代が移り変わり、広汎性発達障がいと呼ばれる、軽度の発達障がいも学術的にも認められるようになりました。健常と障がいというような単純な分け方の難しさや、ある特定の能力が普通の人よりも高いのに、日常生活では助けが必要になるなど、異質であるというよりも個性としてのとらえ方がなじむこともあって、現代では「包括的保育／教育（インクルージョン）」という言葉を使って、様々な個性が包み込まれたような一体的教育環境をイメージするようになっていきます。折しも、特別支援教育法が施行され、そのことで、様々な個性を持った子ども達が共に生活し学び合うことが法的にも裏付けされました。園や学校側も障がい理由に、入園や入学を拒否することが出来なくなったわけです。

言葉の使い方は様々変化してきましたが、あけぼのは一貫して、障がいと健常を区別するのではなく「全ての人の共存」を合い言葉に保育を続けてきましたし、これからも保護者、教職員と共にその思いを貫いていきたいと思っています。

『支援教育の現場から』

■ちゅーりっぷ組とは？

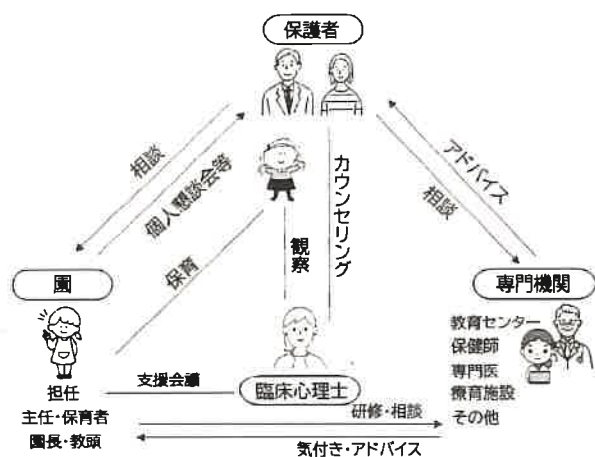
あけぼのでは、1977年以来「共に育つ」という信念のもと、障がいのある子どもを受け入れてきました。当時は障がいのある子どもを受け入れている園がほとんどなく、市内はもちろんのこと、遠方の市町村からも子ども達が通っていました。その頃は、ちゅーりっぷ組という単独のクラスがあり、障がいのある子どもはそのクラスで生活をし、徐々に年齢に応じた学級に橋渡しをするという保育の形態をとっていました。しかし、障がいの有無に関わらず、“共に生活するからこそ育ち合う”という考えのもと、支援学級としての保育室では生活せず、学年によるクラス編成の中で共に生活するように変わってきました。

家庭と園との懇談の機会や、情報伝達を通常よりも多くしているグループ。それを、ちゅーりっぷ組と呼んでいます。ちゅーりっぷ組には、身体障がいや知的障がいの他、自閉スペクトラム症（軽度の自閉症、高機能自閉症、アスペルガー症候群）やADHD、LDといった軽度発達障がいなど、公的機関や専門職による診断や判定を受けた子ども達が在籍しています。主な取り組みとしては、月1回の個人懇談や職員間での支援会議（支援の必要な子どもの様子について、職員間で話し合う場）の内容の充実を図っています。また、希望される保護者の方は、臨床心理士のカウンセリングを受けることができます。

■子どもを取り巻く支援の輪

子ども達は集団の中で共に育ち合い、多くのことを学びます。しかし、一人ひとりの特性に合わせた個別の支援を、もう少しきめ細やかにしていくべきではないのか？という疑問も生まれてきました。もちろん、保育者は本を読んで障がいの理解を深めたり、研修や勉強会にも積極的に参加したりしていますが、幼稚園・保育園は療育施設とは違いますし、保育者は障がいについての専門家でもありません。そこで、専門の先生（臨床心理士や言語聴覚士）に保育の現場で直接アドバイスを受け、様々な事例を挙げて、この子が今困っていることは何なのか？どうすれば園生活がスムーズに行えるのか？自信をつけるにはどうすればいいか？など、職員全体で支援方法を考える機会を作っています。また、職員間で情報の共有をしながら、ちゅーりっぷ組の子どもだけではなく、全ての子ども達の育ちをチームで支えていこうとしています。

※図1



子どもの育ちを支えるためには、図1のように子どもを中心に据えて、園と保護者、専門機関、臨床心理士と連携することが必要です。まだまだ、十分に機能していないところもあるとは思いますが、今後も自己研磨を怠らず、今子どもにとって何が必要なのか、何を大切にすべきかを共に考え、手をたずさえて歩んでいきたいと考えています。

■小学校へ、バトンタッチ

幼稚園・保育園での遊びの中で様々な学びの基礎を培った年長児は、卒園すると小学校へと就学し、本格的な学習や集団生活が始まります。子ども達を取り巻く環境は大きく変化しますが、できるだけ子ども自身が大きな段差を感じず、スムーズに学校生活を送れるよう、小学校と連携しながら様々な取り組みをしています。

年に数回子ども達が小学校に出向き、小学生と交流する中で「小学校ってこんなところなんだ！」と意識し、3学期には学校体験をさせてもらい、授業の様子を知る機会を作っています。また、各小学校の先生があげぼのに来て、就学する子どもの様子を実際に見てもらう機会も設けています。

特に、支援の必要な子どもについては、就学した途端にまたゼロからのスタートにならないよう、こういう時にこういう支援をするとうまくいった、などという具体的な情報を可能な限り伝達することで、小学校でも適切な支援と配慮がなされるように働き掛けています。

■最後に・・・

お子さんのことで気になることがある、就学にあたって心配が出て来たという方は、園に気軽にご相談下さい。また、豊中市の教育センター・豊中市立児童発達支援センター相談窓口がありますので、ご利用下さい。

●豊中市教育センター

子どもの言語・心身の発達などに関する悩みや質問についての相談窓口は、

7F教育相談係（TEL 06-6844-5292）

就学に関する相談は、6F養護教育係へ（TEL 06-6844-5293）

●豊中市立児童発達支援センター

こども療育相談『つぼみ』2階（TEL 06-6866-2377）

「子育ての中で一番悩んだこと」

理事長 安家 周一

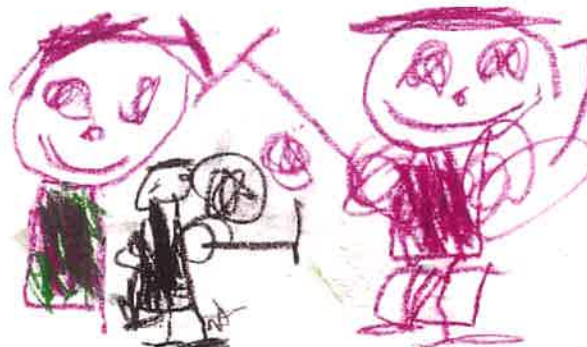
今年も輪になってを発売する年度の最終時期となりました。私へのお題は「子育てで一番悩んだこと」というものです。いろいろ思い出して考えてみましたが、今になって思えばなんてことはなかった、というのが実感です。

私たち夫婦は産休明けから保育園に子どもを預け、バリキャリで働いていました。立場上職員が休むとなれば、ピンチヒッターとして仕事に就いたり、1日12時間の仕事でてんてこ舞いの子育てでした。長男のときは川西市に在住していて、2人目の出産と重なり、産休育休でしたが、次男が生まれてすぐに豊中市初の生後57日目からの乳児保育所を開設することになり、妻は主任保育士として働くことになりました。1日12時間、息つく暇もなく働き、次男はあけぼの簡易保育所での長時間保育でした。あけぼの幼稚園と共存していた保育所で、幼稚園の子ども達は水曜日は午前中、それ以外も13時30分には保育が終了し帰宅します。大好きな仲間が家に帰ることが納得できず、自分も帰りたいと強く訴えていました。私の仕事の融通が利くときもありましたが、外部の研修会や会合など思うように都合がつかず、我慢をしてもらうことがよくありました。息子は妻の妹である叔母のKさんに、「お母さんは、実家のおばあちゃんみたいな仕事良かった(専業主婦のこと)」と話していたそうです。

私自身も共働き家庭で育ちました。友達の誕生日会に呼ばれることがありました。時間に間に合うように普段着のままお宅にお邪魔すると、友達は少し上等な服装です。私は???。それに、みんな、子どもへのプレゼントを用意しているではありませんか。とがめられたことはありませんでした。肩身の狭い思いをしたことは忘れていません。その経験からも、できるだけ我が子の思いに寄り添いたいと思っていたのですが、現実には厳しい状況でした。

近年両親が共に仕事を持つ家庭が多数となりました。保育環境も改善され過去のような悲しい思いは少なくなっているのかもしれませんが、たまに14時迎えの日には周りのみんなに「俺、14時迎え〜」と自慢げに話す様子を見ると、特別感はあるのでしょうか。この様な状況を『子育てで一番悩んだこと』と言えるのかどうかは分かりません。子どもに我慢を強いていたことが、成長にとってどのような影響があったのかは不明ですが、2人の息子夫婦は共働きを選択し、子どもを長時間の保育に委ねていることを考えると、そんなにネガティブではなかったのかとも思うのです。もしかすると、耐え得るくらいの我慢は必要で、生活全体で親子の関係が良好であれば、その子らしくなるとなく育つのではないのか、と思ったりします。

子どもの思いを遂げてやろうとするが、なかなか思うようにいかないことも多くあります。子どもは「親を育てるために生まれてくる」の言葉通り、その葛藤こそが私たちを育てる大切な栄養になるのだと思います。



「カウンセラーとのつながり。もっと身近に感じてもらえるように」

公認心理師・臨床心理士 久司 万里子



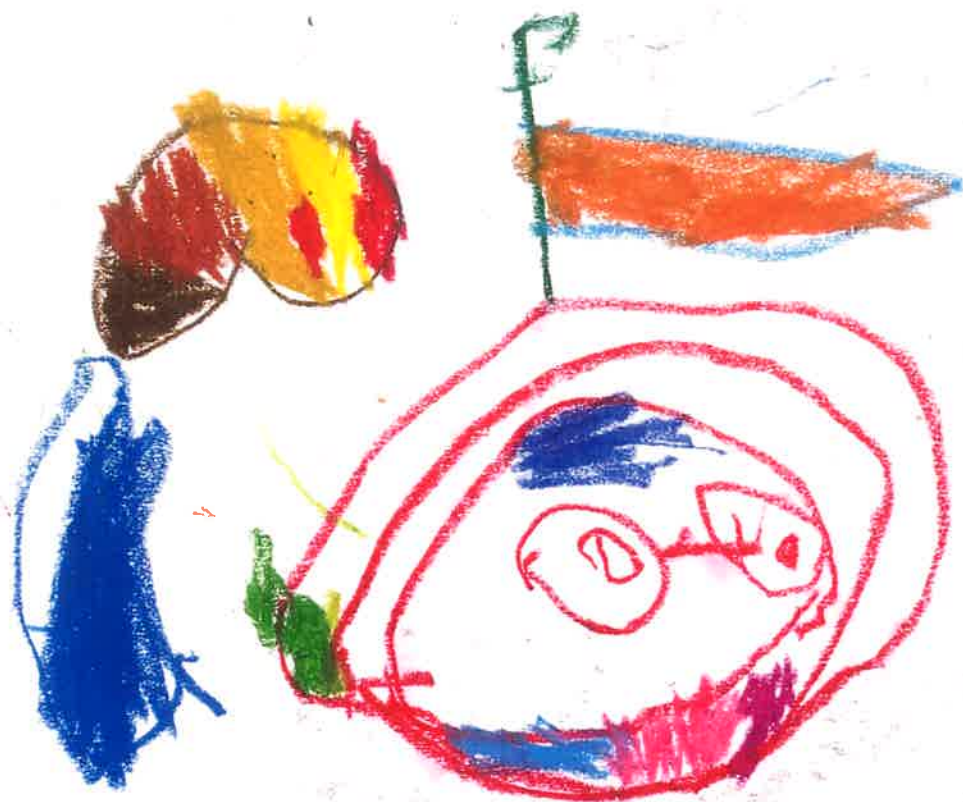
今回のタイトルは『カウンセラーとのつながり。もっと身近に感じてもらえるように』をいただきました。またそのタイトルに至った理由(カウンセラーの在り方や立ち位置、誰でも何でも気軽に相談できること。私の悩みなんで…などと思うことなく心の内を吐き出すことで、見えている景色が変わることもある)も教えていただきました。タイトルとその理由をお聞きし、カウンセリングやカウンセラーの存在は、日常生活では身近ではなく、遠い(遠くまではなくても近くはない)感じをみなさまが抱かれていると改めて感じました。改めてと書いたのは、日々のカウンセリング中にも同じ感じを抱いていたためです。というのも、初めてカウンセリングに来られる一定数の方が、「こんな相談で来る人って私以外にもいますか?」「これって相談していい(カウンセリングの対象)んですか?」と尋ねられるからです。これらから、カウンセリングで話す内容は、何か重要な内容でなければならない、そのようなイメージがあらわれるのかもと感じていました。そのため先のお尋ねには、「どんな相談でも大丈夫です。こちらでお聞きできるものはこちらでお聞きし、他の所(機関)で話す方が困り感が解消できるものはそちらを紹介します。」とお答えしています。また「これって愚痴みたいな感じなんです。友達に相談しようと思ったけれど、どうしようかと思って…」など、友人や家族に相談するのと、カウンセリングで相談するのでは、何が違うかを疑問に思われ、それを尋ねられる方もいらっしゃると思います。

毎年4月のカウンセラー便りで、『キンダーカウンセラーってどんな人』の説明でカウンセリングがどういうものを次のようにお伝えしています。『カウンセリングとは、悩み事やここにひっかかっていることについて、カウンセラーと一緒に考えていくことです。そして最終的には、相談に来た人自身がそのことを改善できるようにお手伝いをしていきます』と。そしてこの説明の横に、道標を見る上記のイラストを挙げています。つまり、カウンセリングで話す内容は、『悩み事』や『ここにひっかかっていること』で、その内容がどんなものであっても構わないということです。先に書いた『こんな相談』であっても、それで悩んでいた、ここに何かひっかかった感覚があれば、それらをお話ください。話すことは『カタルシス』を生みます。カタルシスとはギリシャ語(katharsis)で、辞書には『①悲劇などを見て恐れや悲しみを味わうことによって、心に鬱積したしこりを取り除き、快感を得ること。精神の浄化作用。アリストテレスの用語。②抑圧されている感情・記憶・観念などを言葉や行動で外部に発散することによって、それらから解放されること。また、そのための精神療法の技術。浄化法』と書かれています。話すことで、様々なもの(鬱積したしこりだったり、抑えこんでいる感情や記憶や思いなど)が解放される道ができます。また、カウンセラーは、みなさまと個人的なつながり(利害関係)がない立場です。そのため、カウンセリングの場で話したことで、カウンセラーとの関係が悪くなったり、こんなこと話したら変に思われるかと思ったとしても、カウンセラーとはカウンセリングでしか会わないため、それが日常生活に影響を与えることはありません。そこが、友人や家族に相談することと異なるところです。

あとカウンセラーとのつながりを、身近ではないと感じさせているのは、学期毎に出すカウンセラー便りも原因ではと少し感じています。便りを通じ身近に感じていただきたいと思う一方で、変なことをお伝えしては大変と思う両方の気持ちがあります。そのため、便りの中に児童精神科医・心理学者や発達の特門家が話された内容を引用することが多いです。今ここでも“児童精神科医”“心理学者”“引用”など硬い表現が多いですね。硬い文章ですが、これを書いている私は、関西のおばちゃんでカバンに飴を常に持っている(配ってはいませんが)人間です(関西のご婦人の皆様、このような表現をすみません)。私がどんな人物か、水曜日に園内をウロウロしていますので、保育参加や送迎時に見かけましたら観察していただければと存じます。硬くない(!?)、久司を見ていただけるのではと思っております。カウンセリングやカウンセラーを少し知っていただけましたか?おしゃべりしたいと思われましたらいつでもお声掛けくださいね。

寄稿①

保護者の方から、日々子どもと向き合う中でのつぶやきをお寄せいただきました。
子育てする中で感じられた様々な想いが綴られています。



保護者からの寄稿①



息子と自転車に乗る際、手におもちゃを持ったまま乗ろうとするので「今から車がいっぱい通る道を通るから、おもちゃを落としてもすぐに拾えないかもしれないよ？車に轢かれて壊れるかもしれないけど、それでも大丈夫？」と確認しました。しかしそれでも持っていたいと言うので、そのまま自転車を走らせたところ、案の定走り出してすぐにおもちゃを落としました。私は少しイラッとしながら拾い、「しっかり持っててね。次は拾えないかもしれないからね」と言ってまた自転車を走らせました。家に着くと「1回しか落とさなかったね！」と誇らし気に言う息子。確かにそうだなと思い、小さなことでカリカリし過ぎていたなと反省しました。いつも自分とは違った視点で気づきを与えてくれて、ありがたい存在です。

保護者からの寄稿②



年長の娘、間もなく小学生です。目を離さないように、手を離さないようにと育ててきた我が子が、春には1人で学校へ行くななんて信じられない気持ちです。
年長さんになってからずっと、成長の喜びと共に少しの寂しさを感じていました。

そんな私の気持ちが変わるきっかけがありました。ちびっこキャンプです。
お泊まりに若干の不安はあったものの、楽しみでもあったようで、すんなりと出発し、ケロっとした顔で帰ってきて「楽しかった！」とひとこと。その日は多くは教えてくれませんでした。

ところが数日後の夕方、夕焼けを見て突然

「テントで寝た日はめっちゃ早起きした！朝の夕方に起きた！」と言い出しました。

朝やろ？夕方ちゃうやろ？と聞くと

「朝にも夕方があるでしょ！朝の夕焼けの時間に起きた！」と。

なるほど、朝焼け！！

聞けば、テントで寝た日は早起きをして、きゅうりのなかまでピンク色の朝焼けをみたそうです。そのあとで、もう帰る日だから捕まえていたカエルを逃がしにいったと教えてくれました。キャンプで過ごすこともたちの姿が目につかび、綺麗だったであろう朝焼けを思ってなんだか胸がいっぱいになりました。

自分でみる景色より、我が子から伝え聞いた事を想像する方が何倍も輝いているように感じました。

成長につれ、親と一緒に同じものを見ることはどんどん減っていくのだと思います。
寂しくはありますが、これから、ちびキャンの朝焼けのような素晴らしい経験を、たくさんして欲しい！そして時には聞かせてもらおう、と楽しみになりました。

この先も朝焼けをみれば、「朝の夕方やなあ」と思い、娘と密に過ごした幼稚園での3年間を思い出したいと思います。

子ども達の経験を大切にいつも寄り添ってくださった先生方、ありがとうございました！

保護者からの寄稿③



大好きな息子とは、普段、手を繋ぐ時は、恋人繋ぎをしています。息子から手を繋いでくれる時も、恋人繋ぎをしてくれます。先日、ふと気になって、幼稚園でお友達と手を繋ぐ時はこうでしょ？と普通の繋ぎ方をしたら、どうやら違う様子。。今日、『森とあるこう』でバディと手を繋いでいるのを見たら、バディとも恋人繋ぎをしていました！お友達との恋人繋ぎを目撃したママの表情を見てニヤニヤしている息子と、複雑な心境の母でした。

保護者からの寄稿④



うちの子どもたちはみんな素敵だ。

上の子たちが小さかった時は、あけぼの的関わり方はできなかった。

やりたいことを子ども目線で優先してあげなかった。たくさん制限していた。私が望むような子どもであれというプレッシャーも強くあっただろう。ママがダメと言ったらだめというような独裁的な雰囲気があった。火がついたら怒り方がひどい、長い、根にもつ。わたしに余裕がなかった。

そんな中ですら、子どもたちは辛かったことまで栄養分にして、素敵な要素を身につけた。

少し厳しすぎた、もっと自由にのびのびとさせてあげればよかった。求められたタイミングで抱きしめてあげればよかった。話をもっと聞いてあげればよかった。ベットに入ってからもっとあれこれ話せばよかった（もう寝る時間だから、しー！静かに！と言わないで）いろんな後悔はあるけれど、厳しいなりにしっかりとした子になった。

あけぼのの考え方は、わたしと子どもの関わり方を変えた。大人の都合優先を、子どもの権利を守るように。私がいいと思う方向へ子どもを引っ張る子育てから、子どもの中にある好きや好奇心をじっくり見極める子育てに。

だけど、あけぼのの関わり方で育てられなかった上の子たちも、あけぼのの中で育った下の子も、みんな素敵に育っている。

子どもたちには素敵になっていく力があるんだと思った。（わたしの子育ての未熟さに関わらず）

だから、母としてそんなに気負わなくて大丈夫だったんだ。

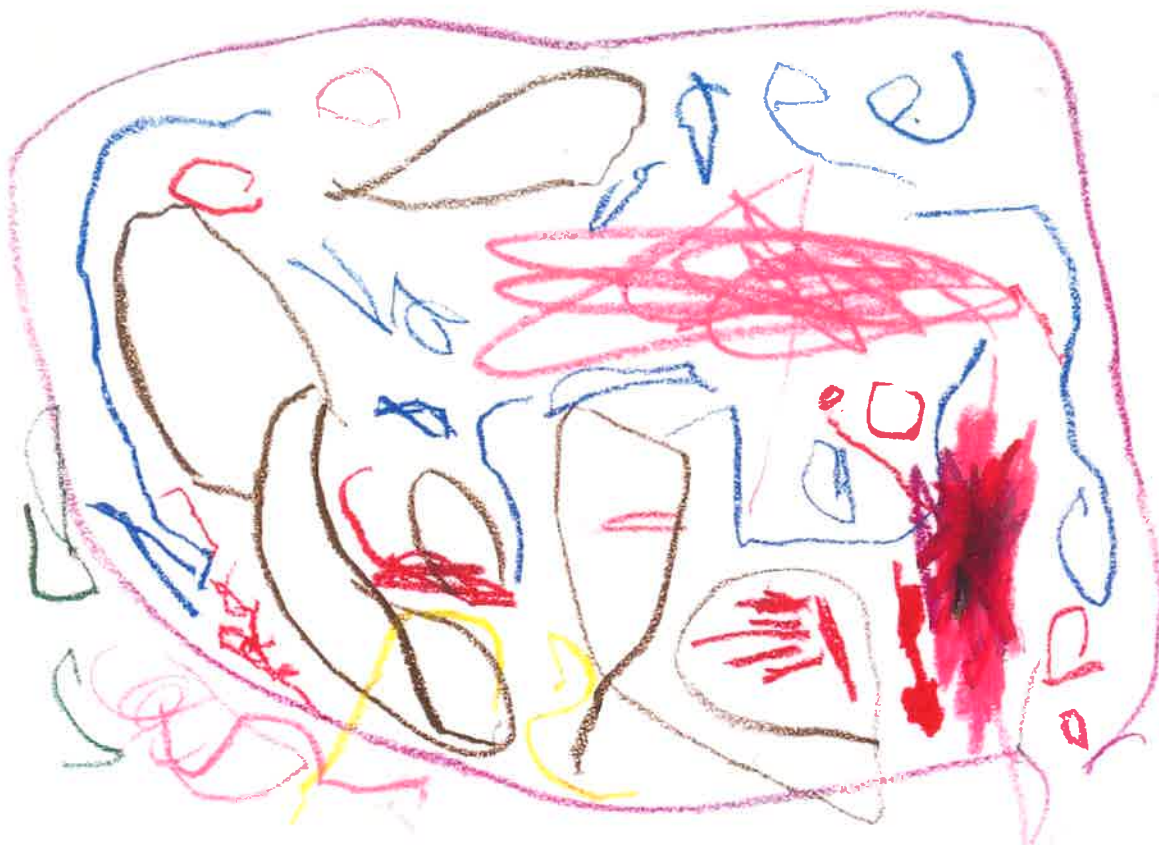
二つの園に通ったからこそわかること。

それでもあけぼので実践される子どもとの関わりは健全な心を育てると思う。

（上の子たちは、大きくなってからあけぼの的関わり方で接することができ、遅ればせながら少しは軌道修正できたのではないかなと思う。あけぼのに出会えてよかった）

あけぼの職員の 特集①

幼稚園・保育園それぞれのキャプテンや学年のリーダー達が
日々の保育の中で感じていることや葛藤、
保護者の方に伝えたい思いなどを綴ります。

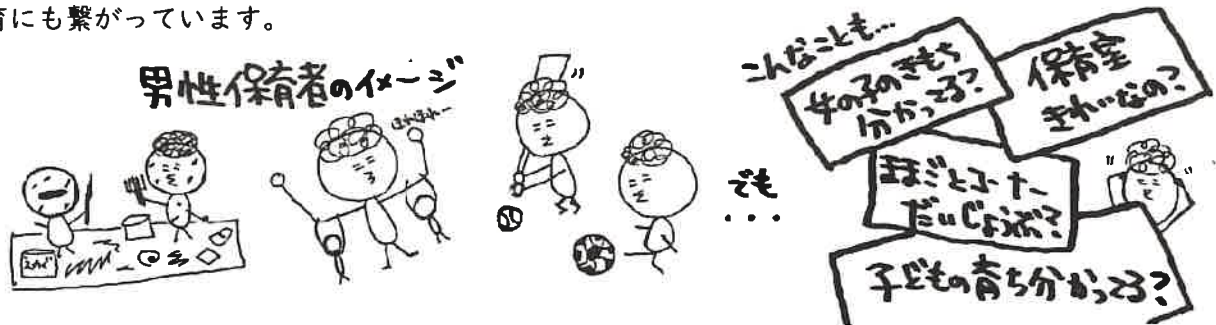


「女性の中で戦う男性職員」

幼稚園教頭 宇和田 修一

皆さんは“保母さん”という言葉聞いたことや使っていたことはあるでしょうか？“保母さん”とは、かつて幼稚園や保育園などで乳幼児の保育にあたっていた女性職員を指す言葉で、2003年の児童福祉法改正により、男女共に保育士資格に統一され、名称も“保母”→“保育士”に変わりましたが、まだまだ全国的にも女性職員が多い職業です。私が入職した16年前のあけぼの全体の男性職員は6人、保育者は私を入れてたった2人でした…。

入職2年目で初めての担任業につきました。珍しい男性職員に対し「男の先生に見てもらいたかったからラッキー♪」「ダイナミックな保育してくれそう！」「思いっきり遊んでください！」など、嬉しいお言葉をいただきました。とは言え、良い悪い共に目立つ男性職員。「ダイナミックに遊んでくれるのは良いけれど、お部屋って綺麗なの？」「ままごとってどんなものがあるのかな？」「子どもの成長した所ってわかっているのかな？」など、女性職員同士では話題にもならないことも“ちゃんとできているのか？”“考えているのか？”と、比べられたこともありました。負けず嫌いな私は（実は）“女性にはできて男性にはできない”と決めつけ？思われる？ことが嫌で、保育室のクリーンやままごとコーナーの充実度に関してはそれまで以上に力を入れて環境作りをし、今の自分の保育にも繋がっています。



入職して6年が終わろうとした頃に1つのニュースが飛び込んできました。大阪市の南にある園にて、保育中に男性職員が乳児の女児にわいせつな行為をして捕まったことがテレビで大きく取り上げられました。「なんてことを！」「あけぼののおとなも…とか思われたらどうしてくれるんだ」「男性職員に対して不信感をもたれていないかな…」と強い怒りや不安感を抱いたことを今でも鮮明に覚えています。そんな中、次年度の人事が発表されました。配属先は1歳児の担任……。絶望でした。

“保護者は担当が男で嫌じゃないかな？”“疑われたりしないかな？”と不安感丸出しで迎えた4月。保護者の方と対面するなり「やった～しゅうまるだ！1年よろしくお願ひします！楽しみ～♪」と、女の子をもつ保護者に言われた瞬間、それまで感じていた不安感は全て吹き飛びました。“世間ではそのような事件があっても、あけぼののおとなは違う！大丈夫！”ということを出して伝えてもらえたことに感謝しかありません。お母さんにとっては何気ない一言だったかもしれませんが、私にとっては救われた一言でした。Fちゃんのお母さん、ありがとうございました。

16年たった現在、男性職員は10人。保育者は6人と、少しずつではありますが、男性職員の増加に喜びを感じています。とは言え、全スタッフ90人以上の中の男性10人なので、まだまだ1割程度でしかないのも現状…。 “あけぼの男性職員は大丈夫”と信じてくださっている保護者の存在も感じながら、それに甘えることなく、毎年排泄や着替えの際の配慮や立ち位置などについて、男性職員全員で研修を通して再意識をしています。女性スタッフの中で埋もれながらも男性職員としての良さを今後も出していきます！

「過程を大切にしたいあけぼのの行事とは」

幼稚園キャプテン／年長リーダー 柴田 弥生

「当日は、お休みさせようと思っています。うちの子が参加するとこの子のクラスは勝てないと思うので…」

以前関わっていたちゅーりっぷ在籍の年長児Aちゃんの保護者が9月頃に打ち明けてくださったふんぱつひろば（運動会）に対するお気持ちでした。幼稚園生活最後のふんぱつひろば。どんな気持ちで打ち明けてくださったのか。色々と想像し胸が苦しくなったことを思い出します。

結果的には、勝ち負け等当日の姿ではなく過程を大切にしていることや、取り組みでのAちゃんの様子をお伝えする中で、ふんぱつひろばに参加することを選んでくださいましたが、その中で感じたのは、“Aちゃんが友達に認められ、クラスの一員として参加することができるのか”ということへの不安でした。そのような感情を抱かせてしまったという責任を感じると共に、インクルーシブ保育を大切にしている、あけぼのの行事の在り方について、改めて考えるきっかけとなった出来ごとでもありました。

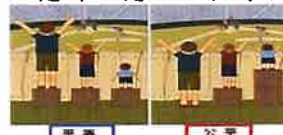
あけぼのの行事を初めて見た方の中には「何をしているのかわからなかった」と感想をいただくことも少なくありません。その中でもふんぱつひろばを例にすると、一般的に運動会で行われるようなプログラムではないこと、また毎年プログラムが変わる為、内容の予測がつきにくいことがその理由として挙げられるかと思えます。なぜそのようなプログラムになるかという、毎年その学年の担任が1学期の子ども達の姿から2学期をイメージし、どのようなプログラムになれば子ども達一人ひとりの良さを引き出せるのかを話し合い、決めているからです。見ている人のわかりやすさよりも、子ども達にとってどうかプログラムを考える際の大きな指標になっています。



こうしてプログラムが決まったら保育を進めていきます。子ども達が、なかまとして友達に目を向け、クラスの現状に気付き考える機会になるこの過程を、Aちゃんの件以降より丁寧に向き合うよう意識しています。例えば、鬼ごっこのような競技をイメージした場合…



一人ひとりの個性が輝けば輝くほど、比較し合いぶつかることも当たり前になります。ただ、ぶつかり合いを予測し、大人が先に手を出しルールを整えすぎること、出来るのが当たり前（過半数）になり“ルールを守れない子”を比較対象にした、ぶつかり合いになったりもします。“〇〇ちゃんはルールが守れない”“出来ていない”等と行動に目を向けるのではなく、“ルールがわからない”“一生懸命になるとルールを忘れてしまう”等の友達の困り感に気付けるようになってほしいと願っています。一人ひとりに目を向け、みんなが楽しむ為の最善（平等ではなく公平なルール）とは？を子ども達と考える中で、子ども達が納得できるものを導き出せるよう、大人が考えた完璧なルールではなく、子ども達と考えて作り出せる余白を残した未完成なプログラム作りを意識していきたいと思っています。子ども達が遊ぶ中で、作り上げていくそんな行事に意味を感じて、今日も保育に向かいます。





5 年前に襲ってきたコロナにより約 3 年、人と人との関係は繋がりがたくても繋がれなくなりました。2020～2023 年 3 月までは、この正体不明だったウィルスのせいで、かぞくに在籍の保護者の方に園内へ入ってもらうことが難しくなり、北門前での引き渡しとなりました。門にいる職員がインカムを使用し、「〇〇ちゃんお迎えです。」と伝え、園内にいる職員が探し、北門にきた子どもを保護者の方へと引き渡します。その時の会話は「おかえりなさい。」「お待たせしました。さようなら。」で終わることがほとんど。北門に立っている職員は 1 人。シフト制の出勤時間によって変化し、約 1 週間交代で人が入れ替わっていました。またお迎えに来られた方へ子どもを引き渡すことが役割で、その日の子どもの様子を伝えることはほとんど出来ませんでした。あけぼので大切にしている共育、ともに子育てする人と人であるはずなのに、そこが出来なくなっていることを感じ、保育者の悩みとなっていました。改善策としてモニターで写真を流したり門担当者に子どもの様子を共有して保護者の方へお伝えしたり出来るようにと考えるようになりましたが、一気にお迎えに来られるタイミングもあるため、全員の方とおはなしすることは無理があり、どんどん保護者の方と保育者が繋がっていらなくなる感覚になりました。

その時々で良い方法を考え試行錯誤していると、時間は経過し、コロナがインフルエンザ同等の菌ということがわかり始め、2023 年 4 月を迎える前に、改めて様々なことを見直す機会となりました。かぞくとして、保護者の方と保育者の繋がりを復活させるため、お迎えに来られるタイミングでかぞく担任がいつでもいる仕組みへと切り替えることにしました。その日あった出来事をお伝えできるように、そして子どもの遊んでいる様子を見ていただけるようにと考え、園庭や保育室に入ってもらうことに！実際に運用する前にどうなるのかやってみようということで、2023 年 3 月末、2022 年度在籍の方の残り 1 週間の時点で始めました。その期間の保育者と保護者の方々の声がたくさん聞こえてきた園庭の様子が今でも情景として忘れられません。

園でたくさんの時間を過ごしていることからいつの間にか『長時間保育』と呼ばれていた 2 号児の保育時間ですが、たくさんの時間を過ごしているからこそ、同学年だけでなく、異年齢の子ども達と関わり、自分の居心地のよい相手を見つけて過ごしています。また、すぐ横を見れば、なんだか魅力的なことが！憧れの気持ちを抱きちょっと挑戦。反対側では困っている子を発見。助けてあげた方がいいのかも…でもどうやって？と考えています。核家族が進んでいると言われる社会の中で、様々な発達の子どもの達と一緒にいるからこそ、毎日のように憧れ・思いやり・安心・葛藤を感じられる時間はとても大切であり、心の育ちが大きく得られると考えています。このような点も『かぞくのじかん』と名称を変更した一つです。このように集団の中で子ども達が毎日出会う気持ちを保護者の方へお伝え出来るような時間を増やすため、2023 年 4 月より基本的にいつでも担任がいるという仕組みを始めて約 2 年経とうとしています。この仕組みを生かすため、どう保護者の方を迎え入れるのか？どのような内容をお伝え出来る方がいいのか？など、話し合い、学び合い、実践しながら今日に至ります。まだまだ今ある環境を当たり前と思わずに、高めていきます。

かぞくのじかんまで過ごす子ども達は、クラス担任・かぞく担任・早朝保育担当・保育フリーとたくさんの大人に包まれています。だからこそ、1 人をたくさんの視点から見つめ、育とうとしている姿をみとり、未来への願いを馳せています。その園と家庭での様子をおはなししながら、一緒に子どものことを考えていけたらと思っています。かぞくのじかんにいるからこそ『共育』するメンバーが増えたと思ってもらえたら幸いです。今日も保護者の方にお子さまの育ちや心の葛藤と一緒に見守る 1 人として、園での様子をおはなしさせていただきます。

「幅広い年齢層との出会い」

保育園主任 佐久間 志保

私が学生の頃、就職先を決める上で重要視していたことに“幅広い年齢の職員が務めている”という点がありました。今になって“何故だったのだろうか？”と振り返ってみると“様々な立場や役割があることで偏った意見だけでなく多様な考えが飛び交っているのではないか。”と思ったことと“そのような環境にいる人たちはきっと柔軟に物事を捉えようしてくれる素敵な集団であろう。”そして“幅広い年齢の人達が働いているということは、きっと働きやすく自分の居場所が見つかりそう。”と、期待を膨らませていたからだと思い返しました。

あけぼの学園には20歳から80歳近くの職員が総勢90名ほど働いています。実際に様々な年齢の職員と一緒に仕事をしてみると、それぞれのバックグラウンドがあるので経験してきたことや大切にしていること、学んできたことが違うからこそ、その人の纏う雰囲気、関わり方、考え方があるのだということをじわじわと感じます。このような経験から、“懐の深さや人として厚みのある方って、とても魅力的だな”と思うようになりました。“そのようになるためには”と考えた時に同じ事ばかりをこなすのではなく、上手くいくかわからないけれど、まずは挑戦してみたり、上手くいかないことがあっても必要な経験だったのだと受け止め、様々な立場の人の気持ちに寄り添えるありがたい機会だったと捉える意識をしたりしました。そして、できる限り色々な人と関わりたいと思うようになりました。

最初は、幅広い年齢層との出会いは大人にとって良いのではないかという角度でしか見ていませんでしたが、あけぼので働き子どもと当たり前のように関わっていると、これって子どもにとってもいい影響を与えているのではないかと感じるようになりました。あけぼのでは様々な年齢層、経験、背景を持つ職員が一丸となって子どもと向き合っています。こうした多様な職員達と日々関わることが、子ども達にとってどれほど価値のあるものなのかについて考えてみたいと思います。

年齢を重ねている職員と関わる子ども達は、話し方、落ち着いたテンポ感が心地良い存在になり、なんだか安心している様子。そして、さらりとこなす掃除や伝承遊びなどの技にうっとりする姿も見られ憧れを持っているようです。初めは、目で追っていたところから、職員に声を掛けられるようになると親しい関係に変わり、気づけば真似て同じことをしている光景に。弟子入りしているようにも見えます。若年次の職員と関わる時は勢いやパワー、斬新なアイデアからわくわく感を抱き、一緒になってがむしゃらに遊ぶ空間が面白く傍にいたいと感じているようです。

こうした各世代によつての経験は異なり、子ども達にとっては多角的な学びの機会となります。そして、年齢層が異なることで「年齢や世代によつて考え方や接し方が違う」ということを自然と学んでいきます。この経験が、将来的に他者との違いを理解し、尊重できる人間へと成長するための土台を作り上げるのです。また、目の前で繰り広げられる多様な価値観や考え方を見聞きすることで自己理解を深め、他者との違いを受け入れられるようにもなってきます。

このように集団生活の中で同世代での関りだけでなく、そこで取り巻く様々な人との関わりが異なる背景や考えを持つ人々と協力し合うことの大切さを学び、豊かな人間性を育てていくことでしよう。大人にとっても子どもにとっても幅広い年齢層との出会いはとても貴重で価値があり、今後大事にしていきたいものだと感じます。

寄稿②

保護者の方から、日々子どもと向き合う中でのつぶやきをお寄せいただきました。
子育てする中で感じられた様々な想いが綴られています。



保護者からの寄稿⑤



〇〇ちゃん優しかった、〇〇とお店屋さんした等、息子の話からお友達の名前を聞くようになりました。周りのお友達との関わりから世界がまた広がっているのを感じます。

昨年はサンタさんがよくわかっていなかった息子に「サンタさんって知ってる？」と聞いてみました。「さんたさんは、ゆきがふったらにくるの」としっかり答えました。

家ではサンタさんのお話をしていなかったもので、保育園で教えてもらったり、聞いた事を覚えている事に感心しました。

これからの成長が楽しみです。

保護者からの寄稿⑥



お友達とトラブルになったら、自分の子どもに無理やり謝らせないといけない。

お友達に「かーしーて(貸して)」と言われたら、すぐに貸してあげないといけない。

挨拶をされたら、子どもにも挨拶をさせないといけない。

がんじがらめだった私の子育ては、
あけぼのに入って
一気に糸が解けました。
どんな時でも、
子どもの味方になってくれる先生がいる。
私の不安に寄り添ってくれる先生がいる。

ここは
子どもも、私も、安心して「じぶんらしく」いられる場所でした。

5年間ありがとうございました。

保護者からの寄稿⑦



11月の小学校の授業参観のこと。校舎は足元から冷えるので、大人は皆コートを着用、子供達もほぼ全員長袖。半袖の子がいるなと思ったらうちの子含むあけぼの卒の子供達でした。

保護者からの寄稿⑧



家族4人で食べるために4つおやつがあった時。

2人の子供達が1つずつ食べ、とても美味しいからもう少し欲しいと追加で半分ずつ食べ、残り1個。どうしてもパパママにも味見してほしい7歳児と、自分が食べたい5歳児との会話です。

5歳「見えてるのに食べられないと、悲しくなっちゃう」

と、今にも泣きそうな様子。

ママ「じゃあ、2人でもう半分ずつ食べたら？」

7歳「パパにもママにも食べてもらいたい。自分はもういらない」

ママ「それなら、5歳が半分食べたら？残りをパパとママで分けるよ」

5歳「それだと少ない。半分しかない」

7歳「じゃあ、5個に分けよう！5歳が3個で、パパとママが1こずつ。すごいわ、5歳は3個も食べられるんだよ！」

というと5歳児も納得。

そうか、5歳児が「半分」より「個」のほうが多いと感じることを7歳は理解しているんだね。

保護者からの寄稿⑨



昨年4月に異動で大阪を離れ単身赴任を選んだ結果、家族とは平日なかなか会えなくなりました。最近どんなふうに過ごしているのかな？と思いつつ、日々はあっという間に過ぎていきます。

久しぶりに会うと子どもたちはいつも、自分たちでできることを増やしていて、今ハマっていることや最近楽しかった話を披露してくれます。小2長男は筆算や九九、漢字。なわとびは1年前より格段にたくさん飛べるようになっていたり、水泳も気づけば背泳ぎまで始めている…。年長長女はお絵描きや三つ編み、字を書くこと、うんてい。お調子ものキャラに磨きがかかり、カメラを向けるとほぼ白眼。こんなチョケてたっけ…。園でお友達とよく手紙を渡しあっているようで、私にもよく手紙をくれます。園でいろいろ刺激を受けているようです。また先日出かけた際には、1回も抱っこをせがまずに最後まで自分の足で歩ききったり。2人とも昨年の今頃と比べると、親が知らないところで子供はできることを増やしてどんどん成長しているんだと、子どもたちがその姿やふるまいで教えてくれます。

さて3月末からは家族全員で新たな場所で新たな生活を始めます。すっかりホームタウンとなった豊中の街を離れることは、安全圏を飛び出すようで不安は尽きません。ただ、子どもたちの頼もしい様子を見ると、「自然体でやってみよう」「なんとかなりそう」。そう思わせてくれます。あけぼの幼稚園に関わらせていただいた5年間は、我が家にとって本当に素晴らしい時間でした。ありがとうございました。

この街で過ごせたことを有り難い思い出として大切に、新たな生活を始めたいと思います。



わたしの息子は不登校

今、彼は元気に不登校。

でも4年前は地の底を這っていた。

自分を責めて、うーうーとうなりながらベッドにうずくまる。

どうしよう、守らなくちゃ。いや、行けるでしょ！なんでこうなった？誰のせい？何があった？

学校を責めて、自分を責めて、自分の過去を責めて、言い訳して。頭がいつも働いていて、疲れてしまった。

彼は彼らしさを失い、普通に学校に行ける自分でないことに失望していた。

彼が彼らしさを取り戻せることが一番大事なんじゃないか。

そう気づいてからも、人と比べては不安がむくむく湧き上がる。

今ごろ、みんなは頑張っているのに、家でYouTubeとゲームばかり。あなたも頑張rinaさいよ。心でそう思っていると、言葉にも膿が出てくる。

その言葉でなんども彼を傷つけた。

わたし自身も当たり前の幸せな未来を失って、喪失を味わった。

相談センター、カウンセリング、発達外来、フリースクール。。。ネットでは「不登校」の検索ばかり見ていた。

そんな中わたしの支えとなったのは不登校新聞だった。理解者と助言者、そして先輩に一度に会えた。

『エネルギーが漏れてしまう穴を塞いで、心にエネルギーがたまる言葉、愛を注いでいれば、子どもは自然に動き出す。』

何度も目にした言葉。

あるとき、彼は「ま、こんな自分でもいっか」そう思えたことを教えてくれた。彼の言葉から自分に失望する言葉が消えていった。少しずつ。

彼の心は回復した。回復したけれど、だから学校に戻れるわけじゃない。

家で好きなことをして自由に過ごす慣れから簡単に他のみんなと同じペースに変えられるわけじゃない。

でも今の彼にできるくらいの挑戦は提案できるようになった。(提案してもほとんどは却下。彼はもう自分で選択する。)

悩んでいる間にも彼は大きくなる。悩み始めた年にとどまって、回復を待てるわけではない。傷ついて回復する間、時間が失われる。経験も失われる。

あのとき、あんなに傷つく必要はなかった。わたしも、彼も。

ああもっといろんな選択肢があったらいいのに。

これに合わなかったら、こちらの方がうちの子には合うかもしれない。

そんな風を選ぶ、場所と学び方。

必要以上に親と子が傷つかないように、親子が安心して仲間を見つけられる、そんな居場所を作って行きたい。



あけぼの職員の 特集②

幼稚園・保育園それぞれのキャプテンや学年のリーダー達が
日々の保育の中で感じていることや葛藤、
保護者の方に伝えたい思いなどを綴ります。



「人が育つということ」

幼稚園副キャプテン／年少リーダー 渡邊 聖也

今年度で11年目になった私。入職したての自分、5年目の自分、そして今。考え方、人を見る視点がこんなに変わるとは思いませんでした。振り返ってみると様々な経験をしてきたからこそ今の自分があるとわかるのですが、とにかく毎日必死に過ごしてきて、気付いたらこの年数。

数年前からリーダーの仕事をさせてもらっていると、考えることは『どうやったら〇〇が育つだろう？』『どうやったら〇〇は楽しく前向きな気持ちで働けるだろう？』『どうやったら〇〇の個性が活かせるだろう？』等考えればきりが無いほど出てきますが、軸はこの3つなのかなと感じています。このような考え方になったのも今まで出会ってきた先輩方の影響です。私が意見を言った時に「なるほどな。」「いいやん！」と肯定的に返事をしてくれる方が周りに沢山いました。だからこそ、わからないなりに自分の考えをもち、意見できる土台が作られましたし、なにより自分の意見が認められるからこそ当事者意識をもって意欲的に考えられます。仕事が面白い！と感じた時のことを今でも覚えています。

人が成長することに喜びを感じると共に自分もまだまだ成長し続けたいと考えています。あの有名なアルベルト・アインシュタインが「Once you stop learning, you start dying(学ぶことを止めた時、それは死の始まり).」という言葉を残しています。この言葉は全人類に言えるのではないのでしょうか。リーダーだからマネジメント能力だけを磨けばいいのか？そんなことはありえません。保育者として考えると、子どもが育つためにどう関わるのか？勉強すればするほど引き出しは増えますし、同僚から学ぶ姿勢があれば沢山教えてもらえます。学び続けることで子どもの為、同僚の為、自分の為になります。

最後に学ぶ姿勢について考えていきます。学ぶ姿勢がある人はどんな人でしょうか？反対に学ぶ姿勢がない人はどんな人でしょうか？私は人の意見や考えに「なるほど」と思えたり言えたりする人が学ぶ姿勢があるなと感じています。一概には言えませんが、大方そうだと思います。同僚はもちろん、あけぼのの子どもが言う話にはいつも驚かされます。以前年長児とサッカーの話をしていた時「〇〇大阪はな、パスを絶対後ろにするねん！だから前に進まへんねん！」と言っていました。私自身サッカーが好きですが、「なるほどな」と思わず言ってしまいました。どうしてもゴールが入るか入らないという浅はかな視点で見えていましたがA君は違う視点で見えていて、自分の考えを言葉にしています。実際この話を機に私のサッカーの見る視点は変わりました。物事は見方を変えれば全く違う物に変わります。相手の視点を面白がれる、相手の視点を自分にも取り入れるところから学びは始まるのではないかと感じています。いつかヨボヨボのせいやになった時「あの人いつまで経っても学んでいるな」と思われる。そんな人になれるよう、日々子ども、保護者、同僚から学ぶ姿勢を持ち続けていきます。



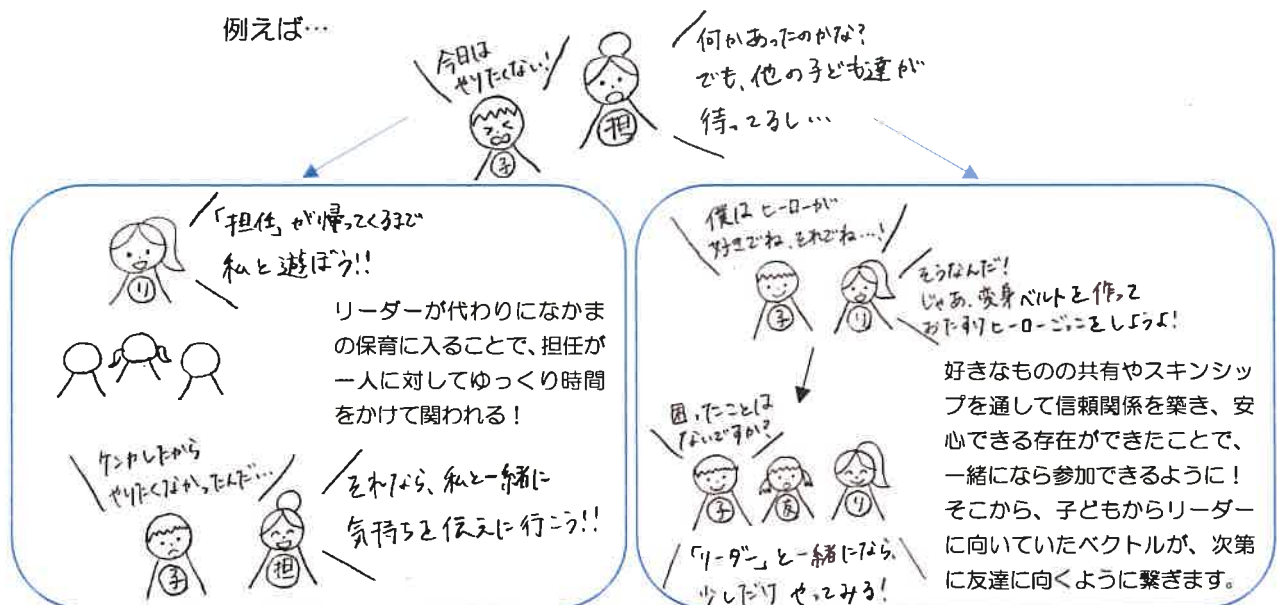
「縁の下の力持ち」

年中リーダー 岡 優夏

皆さん、学年リーダーが普段どのような役割を担っているか知っていますか？小・中・高校では、担任とは別に学年主任という役割があることが多いですが、実は保育業界では担任をもたないリーダーが存在することは珍しいのです。そんな学年リーダーの存在が、保育の中で子ども達にどのような影響を与えているのか見えづらいですね。簡単に言うと、“黒子”や“縁の下の力持ち”のような役割です。

担任は、自分のクラスの2,30人の子ども達の姿や育ちをそれぞれ把握し、向き合っています。では、リーダーは学年の約90人の子ども達のことを全て把握できるかというと、正直難しいところもあります。ですので、基本は担任に委ねつつ、大切なことは担任と一緒に考え相談しながら、間接的に子ども達の姿や育ちを把握し、クラスの保育を支えています。これまでは、担任の中にチーフと呼ばれるポジションがあり、担任として自分のクラスの業務もこなしながら、他の担任からの相談や学年としての業務もこなしていました。保育時間中は他のクラスの様子を見に行くことが難しいので、保育後に相談や共有をすることしかできず、なかなか保育の現場を見て話し合うことができませんでした。しかし、担任をもたないリーダーのポジションが新設されたことで、各クラスの様子を実際に見に行き、現状を把握したり、リーダーも一緒に保育に入りながら話し合ったり、担任にとってより相談しやすい環境ができたと感じています。（担任達もそう感じてくれていたら嬉しいです…！）

また、クラス活動を進めていく中で子どもに対して個別の配慮が必要である時、担任だけでは時間をかけて関わるのが難しい場合もあるので、担任とリーダーで連携し、丁寧に関わっています。



子どもが“やりたくない”という気持ちになるのには、その日何か嫌なことがあったり、ザワザワする環境や集団が苦手だったり等、様々な理由があります。“集団に入ってみんなと同じことをすること”が第一の目的ではなく、“自分らしさを大切にしながら園生活を充実させること”を目標としているので、無理に集団に戻るよう促すのではなく、まずはその子のペースで寄り添うことを大切にしています。その為には、担任とリーダーの連携は不可欠ですし、時にはフリーの職員にも助けをもらいながら園全体で子ども達を見守っています。短い見通しの中で焦って集団に戻るよう促したり、子どもの気持ちを置き去りにしてクラス活動を進めたりするのではなく、子ども一人ひとりが“自分らしさ”を発揮し、子どもも大人もワクワクするような保育ができるよう、これからも縁の下の力持ちとしてクラスの保育を支えられたらと思います。

「おとなも子どもも みんなで“かぞく”！」

かぞくリーダー 岡田 御前

あなたにとって“かぞく”とは、どのような存在ですか？

“ありのままでいられる居場所”“楽しかったことも困ったことも聞いてくれる人”など、その答えはそれぞれだと思います。朝、家庭を出て職場や学校に行くことは、大人であっても「よし、頑張るぞ」と気合いが必要な場面です。夜、一日が終わって家族で団樂している時「あのね、今日ね…」と話している時は、心が緩むような気持ちになります。早朝や夕方に保育を利用する子ども達には、そのようなほっとする時間を園でも過ごしてほしいと願っています。



あけぼの幼稚園では、夕方の時間（13:45～19:00）を【かぞくのじかん】と名付けて、103名の子どもと大人たちで過ごしています。かぞくのじかんの特徴は、年少児から年長児まで異年齢でグループを組み、年の近いきょうだいのように、一緒に遊んで共に育つご近所さんのように、大きくなっていくことです。少し難しそうな、でも“自分もしてみたい！”とを感じるようなモデルが毎日側にいて、真似ることから学ぶ遊びの輪を作っています。

8月のある日、お迎えの方が多く来られる時間帯、年少児Aくんの保護者がいらっしゃいました。同じかぞくの年長児から「A、今日ご飯おかわりしてたで！今は一緒に遊んでる！」と告げられ、その仲の良さに微笑んでおられたところ、その年長児の保護者もお迎えにいらっしゃいました。「Aくんのお母さんですか？いつも仲良くしてもらってるみたいで」「こちらこそ、家でよく話してます～」というやり取りを聞き、子どもをきっかけに、異年齢児の保護者同士の輪も広がっているのだと、嬉しく思いました。

また、昨年度よりかぞくも学期ごとに1回ずつ、懇談会の場を設けています。家庭での悩みを話すディスカッションはいつも大盛り上がり！「うちの子もそうだったよ、でも今はね…」「うちの子が『〇〇ちゃん、幼稚園ではこうしてる』って言ってたよ」と伝え合われている姿が見られ、保護者の方も互いの子どもの成長を気遣ったり、年下の子どもの姿から我が子の歩んできた道に想いを馳せたりする営みが生まれていることに気がきました。

同じ悩みを持っていたり、すでに経験していたりする子育て仲間と繋がれるような、協力し合えるような輪を作っていけたらと願っています。

嬉しいことがあった時、何だかモヤモヤした気持ちになった時、話を聞いてもらったりそっと側にいてくれたり、安心する居心地の良い居場所を、家庭の外にも作ることができたら…。子ども達にも保護者の皆様にも、かぞくのじかんがそのような存在でいられるよう、職員一同、温かい笑顔で「いってらっしゃい」と「おかえりなさい」を伝えてゆきたいと思います。



「保育者経験があっても子育ては難しい ～周りとの繋がりで楽しむということ～」

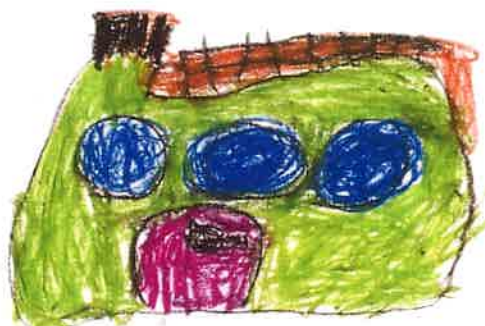
とんぼグループ 宮脇 和華

育休から復帰して約2年が経とうとしていますが、現在も1日1日がとても目まぐるしく、保育園への送迎・仕事・家事・育児など“全て何とかなるはず！”と思っていた自分が恥ずかしいくらいヘトヘトになり寝落ちしてしまう毎日…。体力がいくらあっても足りない！ということはこのことなんだ、と改めて実感する日々です。保育経験が十数年あっても、いざ我が子を目の前にすると、これでよかったのだろうかと自問自答しながら自信を無くすこともあります。特にイヤイヤ全盛期では、保育園に行くことを拒みやっとの思いで連れて行っても、大泣きして暴れて玄関から道路まで飛び出すことがあり、心臓が止まる思いをしたことも。降園時には保育園で頑張っている反動なのか感情の起伏が激しい日が続き、泣き叫びながら道端で寝転ぶ我が子にどう関わったらいのか全くわからなくなり、ただ抱きしめることしかできず涙が自然とこぼれてきたこともありました。保育者だから子育てで困らないということは全くなく、徐々に子育てを“楽しむ気持ち”や“余裕”が無くなっていることや、周りの目も気にしている自分がいることにも気がきました。

しかしそのような時に支えとなったのは、同じ子育てで悩む友達や同僚・子育ての先輩達との情報を共有することでした。悩みを聞いてくれる人がいるということや、“こういうことで悩んでいるんだな”“自分は一人じゃないんだ”“一緒に悩んでくれる人がいる”と思えるだけで心が救われました。子育てで悩んでしまうと一人で考えてぐっと狭い世界に入りがちになってしまいましたが、思い切って視野を広げ周りとの繋がりが増えることで気持ちが楽になり、徐々に子どもとの関わりにも余裕が生まれてくるということを実感しました。そしてその頃から、“周りにどう見られたっていいや。気にせず私らしく子育てしていこう”と思えるようになってきました。

一方で、保護者の方の中にも私と同じように悩んでいる方もいらっしゃるのではないだろうか。また、担任の私が時短勤務を選択していることで、日頃の子育てのちょっとしたエピソードや悩みなどを共有することを躊躇わせてしまっていないだろうか、と思うようになりました。難しさや課題を感じつつ、自身の経験も何かしらの形で生かすことはできないだろうかと考え、今年度は時短勤務の固定時間を外して出勤のローテーションに入るようにしています。可能な限り保護者との対面を心掛け、お互い気軽に声を掛け合える存在になれるよう努めています。

子育てや保育に正解はない分、悩んだり立ち止まったりすることが、これからもたくさんあると思います。ですがそんな時こそ、周りとの繋がりを大切に、あけぼので出会う保護者の方々とも今後も子育ての輪・繋がりを広げていきたいと思っています。そして、今後も担任として、子育てをする親として、“繋がり”ということを意識し、どんな働き方であってもお互いが“繋がり”を様々な角度から感じられるように、私にできることを探していきたいと思っています。



「うちの子、なかよくしてますか？」

ばったグループ 宮脇 知紘

懇談などで保護者の方からよく耳にするこの言葉。私はあけぼのに勤めていて、この言葉にどうしても引っかかる感覚がありました。この場を借りて、あけぼの保育園・幼稚園共に集団で生活する施設の中で「仲良し」はどう育まれているのか、私なりに整理してみようと思います。

「仲良し」とは… みなさんはどんなイメージが浮かびますか？

誰かと一緒に遊べるかな？（1人じゃない）

友達がたくさんいるかな？（人数の多さ） 友達とやり取りできているかな？（やりとりの長さ）

けんかをしていないかな？（気持ちのぶつかり合い）

思い描いた「仲良し」のイメージだけで子ども達の間関係を見ているませんか。数や方法だけではなく、人間関係を築く上での本質を見つめるために、乳児期の関係の築き方に焦点を当ててみました。

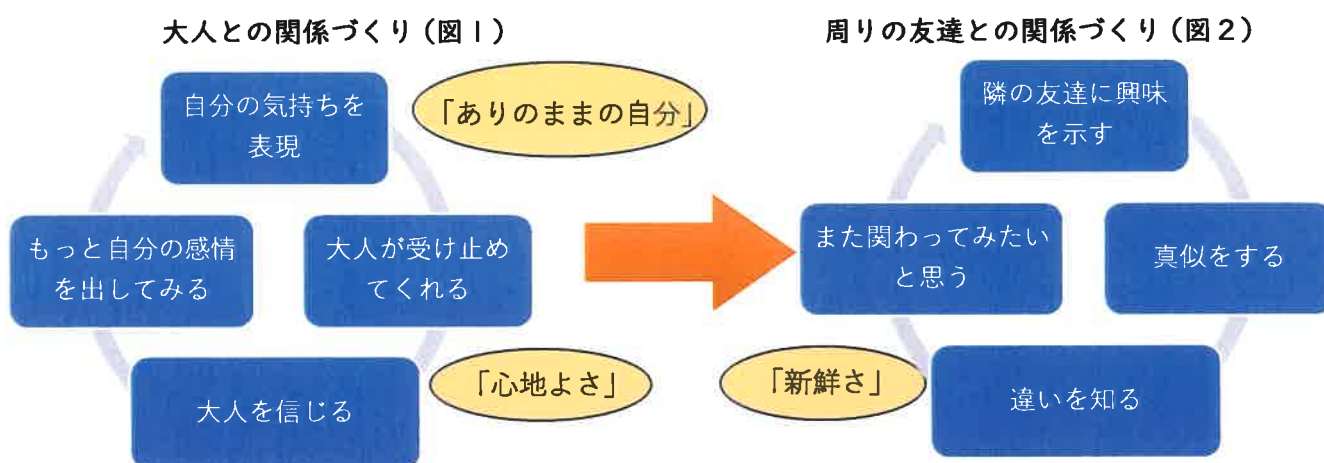


図1にあるサイクルを通して、まずは1対1で大人との関係を築いていきます。自分の要求や感情を受け止めてくれる相手がいることで、『ありのままの自分』を表現し、安心できる『心地よさ』を感じ、自分のこと（好き、嫌いなど）を知っていくのではないかと思います。また、大人との安心できる関係を基盤において、周りの子どもの様子にも興味を示し始めます。（図2）面白そうなことを真似して、一緒であることの喜びを感じたり、時には、自分の気持ちとは違うことにぶつかり、葛藤することもあります。自分とは違う人と関わる中で、同じや違いがあることの新鮮さに刺激を受け、自分の立ち位置や存在を確認することができます。つまり、人との関係を築くなかで、関わる方法を学んでいるだけでなく、自分のことに理解を深めているといえます。自分を見つめて大切にできるということは、周りも大切にできるということだと思います。人と関わった時にはどんなことを感じるかが自分を豊かにしてくれます。この『感じる』経験を私たちは大切にしています。実際に、担当している1歳児グループでも、玩具の取り合いで気持ちがぶつかった時に、「貸して」「ごめんね」「いいよ」の言葉でのやりとりを促すことよりも、その時に感じた子どもの気持ちを聞き取り、受け止めることを大切に関わっています。まずは、素直に感じたことを受け入れられるよう援助し、方法の提案はその次。仲良くとは安心感のもと、自分らしく人間関係を紡ぐことだと考え、いろんな自分に出会える場所の一つがあけぼのであることを保証していきたいです。

今回は乳児期に焦点を当てましたが、幼児期では集団として過ごす人数が増える分、さらに出会う気持ちの種類も様々です。形にとらわれることなく、人と関係を紡ぐ時の子ども達の感じ方に、丁寧に寄り添い、耳を傾けることで人間関係を築く過程を見守っていきたいです。

「だんごむしグループの保育における願いや葛藤」

だんごむしグループ 玉井 友紀

乳幼児期の、特に低年齢児は月齢差による発達の差が大きい（もちろん個人差もあります）、昨年度から0・1歳児混合の「だんごむしグループ」ができました。1歳児の低月齢児と0歳児の高月齢児によるグループです。

まず初めに感じたこのグループ分けの良さは、1歳低月齢児が安心してのびのびと過ごせることです。同じ1歳児でも、3月に1歳になった子と4月にはもう2歳になる子がいます。当然のことではありますが、この時期の1年はとても大きいものです。動きの大きさやスピード、コミュニケーション方法、興味のある遊びや集中力など心身ともに発達の違いが大きく、低月齢児は圧倒されることが多くあります。しかし、月齢の近い集団の中ではそれらの差が少ないため、安心して過ごしやすい、園生活に慣れるのも早かったと感じます。また、0歳高月齢児は、近くに少し上のモデルがいることで、見て真似をしてみるなど生活や遊びの場面でたくさんの刺激を受けていました。

一方で、疑問や心配なことも頭に浮かんできました。1歳児は、来年度には高月齢児（現在のばったグループ）と一緒に過ごすようになる際に、大きい戸惑いがあるのではないかと、0歳児においては、1歳児の子と過ごすことに無理がかかった場面はないか。これらのことについてエピソードを交えて紹介します。

良いところ・1歳低月齢児がのびのび過ごしている

・0歳高月齢児は見て真似をする経験が多い

疑問や心配・来年度、現ばったのメンバーと一緒にになったときに戸惑いは？→〈エピソード1〉

・0歳児に無理がかかっていない？

→〈エピソード2〉

〈エピソード1〉

夏前にばったグループと一緒に中庭や屋上を開放して一緒に遊んでいた時のこと。ばったグループがダイナミックに身体を動かしたりたくさん会話をしたりして遊んでいる姿を見て、驚いたようにその姿を見つめているだんごむしグループの姿がありました。まさに圧倒されているという様子です。しかし、それだけではなく、どんなことをしているのかなど興味を持っている姿も見られていました。時がたって12月に同じように中庭と屋上を開放して遊んだ際には物怖じすることなく、マイペースに遊ぶようになっていました。この半年、それぞれのペースでのびのびと過ごし、出来ることが増えたり見通しを持ったりするなど心身共に成長し自信がついたことに加え、少しずつばったグループと交流する機会を持ってきたことが影響しているのではないかと思います。

〈エピソード2〉

次は0歳児についてです。朝から園庭で1時間ほど遊び盛り上がってきている1歳児に対し、0歳児はちょっぴりお疲れの雰囲気。やはり体力や集中力の面で差が出てきていることを感じました。そこで園庭に降りるタイミングや保育室に戻るタイミングを見直し、1歳児より園庭遊びの時間を短くすることにしました。0歳児の子は保育室でゆっくり絵本を読んだり、自分の好きな遊びを見つけて静かな遊びを楽しんだりしていました。また、0歳低月齢児（あおむしグループ）の子が泣いていると頭を撫でて顔を覗き込むなど、少し先輩になった気分で関わる姿が見られました。

どの年齢でも月齢差はありますが、この時期だからこそ月齢差の大きさを理解して活動する意味を感じた1年でした。年齢だけで線引きをせず一人ひとりに寄り添い育ちを大切にしていけるためのだんごむしグループ。“子どもが中心”というあけぼのが大切にしている考えを取り入れたグループだと感じます。

寄稿③

保護者の方から、日々子どもと向き合う中でのつぶやきをお寄せいただきました。
子育てする中で感じられた様々な想いが綴られています。





我が家は昨年家族が増えた。

年少だった息子は「赤ちゃん」に対し楽しみなんぞなく、よくわかんないけどなんか変わるっぽい・・・そんな心境だったのかなと思う。

それでもお腹が大きくなっていくと「もうね、いっぱいあるけるよ、だいじょぶ」と大好きな抱っこを我慢、そんな事が少～しずつ増えていった。

どんどん兄になっていく…凄いなあ。感心しながら、ある日何気なく息子に尋ねてみた。

「なんて呼んでもらおうか？お兄ちゃん？にいに？アニキもあるで？」

ふざける母にひらめいた少し照れくさそうな顔で

「うーん……〇〇（普段の呼び名）がいい」

「え～お兄ちゃんじゃなくて？」

「〇〇は〇〇だもん」

深い意味なんてないストレートな気持ちに「あ…」と瞬間返答につまってしまった。「〇〇は〇〇だもんね」としか言葉が出なかった私。お兄ちゃんになりたいなんてこの子は言ったことがなかった。

当たり前前の事がすっかり抜けてしまっていた。

息子はまだ4歳、未知の世界が始まろうとしている、寄り添わなきゃ。

帰宅した夫に話すと「なんかいいやん♪兄妹やけど名前と呼ぶの♪」と酔いもあってかなんだか嬉しそう。

それじゃあ私達も息子をお兄ちゃんではなく名前と呼ぼう、息子らしいね、そう決めた。

それから1年、滝のごとく「お兄ちゃん」を連発している私達。

対し息子は「〇〇にちょうだい♪」「それは〇〇のっ！！」仲良しな時もプンプンしている時も一度も「お兄ちゃん」と言ったことがない。

それはまだ「ぼく」と自分を呼ばないせいもあるのかもしれない、ただあの時の気持ちを覚えていて息子なりのこだわりなのかと思うと、大事にしていきたい。

昨日は一生懸命作っていたビー玉の何やらを不意に妹に壊されて「…もう、だんボールにいれてだれかにおとどけて」と訴えてきた。

数ヶ月前は「もうトイレにながして！」と叫んでいた。妹の成長に合わせてちゃんと手段が変更されている。リアルだからリアルじゃないんだか。そんな毎日のように与えられる心の葛藤を、地団駄を踏みながら頑張ってくれている。

あと少しすれば妹が喋り出すだろう、その時また、どう呼んでもらおうか息子に尋ねてみたいと思う。



小さいぬいぐるみ達と共に寝る5歳女兒。ある時、ぬいぐるみが一つ布団の外に落ちていたので、「この子ひとりでこっちにいたよ？もしかしたら寂しくて泣いていたかも」と渡すと、ぎゅーっと抱きしめて、なでなでしながら「よしよし」「だれがすきとかきらいとか、ないからね」「だいすきだよ」と言っていた。園のおとなが言っていたのを聞いて覚えてきたのかな。



テーマからズレますが、1人の親として、能登半島地震を現地で経験したことや教訓を得たことを記したいと思います。少しでも雰囲気が伝わり、災害の備えにつながれば幸いです。

・当日の様子

祖父母宅は昔ながらの日本家屋。夕方お正月番組を観ていると緊急地震速報が流れました。子どもたちは園での避難訓練のおかげもあり、速やかにコタツの下に潜り込みました。(親は咄嗟の判断でプラグをコンセントから抜いています。)なんだ、少し強かっただけか、とでてくると、また緊急地震速報が。今度は全然揺れが収まりません。ガラスの置物や鏡が割れる音がします。子どもたちは怖い！早く出たい！と泣き出します。

揺れが収まりましたが、家が傾いていて、扉や掃き出し窓を開けて外に出られません。雪国なので二重窓になっていますが、内窓が外れて倒れています。部屋によっては棚から物が溢れてしっちゃんめっちゃ。電気は使えますが、家にいることができません。ひとまず最低限の荷物を持ち、なんとか裏口の扉を破り外に出ます。とにかく寒い。最大級の津波警報も鳴り響きますが、一体自分たちが海拔何メートルにいるのか見当もつきません。余震で緊急地震速報が鳴り響く中、祖父母に車を出してもらい、山の方の祖母実家を目指します。祖父が自治体役員のため、小学校や消防署の避難所も立ち寄りましたが車が溢れて入れません。避難所は住民が開設する必要がありますが、公民館や集会所では鍵を持つ人が見当たらないので開設できません。途中、携帯電話の電源が切れかけの人、車のガソリンがギリギリで動けなくなる人、らくらくフォンだけどなぜか機内モードになっていて操作がわからず、家族と連絡が取れない人がいました。コンビニや自販機の水や食糧は売り切れです。道路はボコボコになり、液状化現象で泥が噴き出しているところ、水道管が破裂して浸水しているところ、電柱が倒れているところ、落下物があるところがあり、まともに通行できるところを探しながら進む必要があります。外はどんどん暗くなっていきます。カーナビのテレビからは津波警報で危機感をもって避難を呼びかけるので、子どもたちはどんどん不安になってしまいました。

祖母実家は幸いにも家屋の被害が軽微で、農家のため、お家が広くて食糧備蓄もあり、山の水で煮炊、川の水でトイレを流すことができました。お風呂以外は概ね通常の生活ができ、落ち着くまでの2日間滞在させていただきました。子どもたちは当日でも、いつもの入眠時のぬいぐるみがあったので寝ることができました。大人は小さな余震や鳴り響く緊急地震速報に叩き起こされ寝れませんでした。

なお、大人はお風呂に入らなくても2日ぐらいいろんなかなりますが、子どもたちはそうはいかなかったようで、お風呂に入りたい！と早い段階で訴えていました。

・教訓

①子どもたちのメンタルケア

発災時は情報収集が必要ですが、子どもたちは状況がよく分からず不安になります。これはどういうこと？大丈夫なの？こわいよー！に、説明と声かけが必要でした。また避難時には落ち着けるものやおもちゃや絵本も持ち出す必要があります。避難先で落ち着いたなら、テレビやラジオなど一度切ることも手かと思いました。

普段歩く子どもたちもいざ怖くなると脚がすくみます。余震が来たとき、取り乱さないように淡々と兄弟を抱えて建物から飛び出すような場面もありました。

②災害用備蓄

備蓄用食糧が3日あればよいと思っていましたが、それでは足りませんでした。とくに今回の地震では水道復旧に数ヶ月かかっています。災害用トイレや水のいらないシャンプーがかなりの日数分必要です。水がなくても歯磨きはいつもどおりする必要があります。また子どもや高齢者にとっては避難所よりもお家で避難することが1番ですので家の耐震性を高めることは非常に重要だと感じました。

③避難経路

ハザードマップで地理特性を把握していても地震が起きたときは道路がどんな状態かわかりません。1箇所1経路だけではすこし心細いかもしれません。

④出先の避難所

すべての遠出先の避難所などを把握することは大変かもしれませんが、せめて子どもとよくいく場所では、ここで地震が起きたらどこに行けばいいんだろう？と普段から考えておく必要があるように思いました。

⑤地域の力

能登でできたような助け合いは都会の大阪では難しいと思います。せめて自治体の訓練には一度参加しておくのと良いと思いました。

(余談ですが、関係が密な分、デマが流れるのも早かったです。非常時ほど落ち着いた判断が求められます。)

まだまだ書きたりないことがあります。印象的だったことを記載しました。読みづらくて恐縮ですが、少しでも参考になれば幸いです。また、地震だけではなく大雨災害まで被り、今も復旧作業に追われる能登に心を寄せていただけると嬉しいです。



「ありがとうインクルーシブ保育 ～特別じゃなくてフツー～」

あけぼの幼稚園園長 安家 匠

今年度ようやく実現した小学校の先生があけぼの幼稚園の保育を経験するという取り組み。その振り返りの時でした。「あけぼの幼稚園の卒園児は支援児に対する関りがとても自然で絶妙なんですよ」と南桜塚小学校の橋本校長が嬉しそうに話をしてくれました。「自然で絶妙とは？」ともう少し詳しく聞くと「良い意味で特別視していないし、その子が助けを必要とした時だけ手を差し伸べるのです。」続けて「今日の保育体験を通してなぜそのような子ども達が育つのかもよくわかりました」と感想を教えてくださいました。

長年、あけぼのが大切にしているインクルーシブ保育。あけぼの的に言えば特別なことをしている気持ちは 1 ミリもなく、本当にフツー（普通）だと私は思っています。5, 6 年前から支援が必要な子どもの受け入れ人数も増え、よりフツー度が増したとも思っています。

インクルーシブ保育や特別支援教育と聞くと、しょうがいのある子どもの側面が取り上げられることが多いですが、インクルーシブ保育の本当の価値は周りを取り巻く子ども達の側面から見出すことができると思います。例えば、日々の生活の中で子ども達を見ていると、支援が必要な子どもに関わることや援助することに対して特別なことをしているという気持ちではなく、“みんなそれぞれに違いがあること”や“それを補い合っていること”が、日常的で当たり前と感じているように見えます。まさにフツーなのです。その姿から、あけぼのの子ども達は一般的に言われる、しょうがいや健常などはもちろん、人を区別するという概念や壁をそもそも持たない人間に育っているようにも見えます。

今の子ども達は益々グローバル化が進む世界で揉まれながら生きていくことになります。そうすると国籍、人種、言語、宗教、思想、年齢、発達とあげればきりが無い程の違いに出会います。そんな時、あけぼので育つ子ども達のように違いで区別せず、壁を持たず、その世界がフツーだと捉えられる人々が世界中に溢れれば、本当の意味で多様性を認め合うインクルーシブな世界が実現されるのだと強く感じます。まさにその土台があけぼのの生活なのです。しかしその反面、日本の教育制度に目を向けると、近年少しずつ変化しているとはいえ、健常児だけを集めたような分断された教育や一定の発達の幅の中でグルーピングするなど幅の狭い枠組みの中で育つことがまだまだ一般的です。そうなれば、様々な違いを受け入れられず、すぐに壁をつくる人間に育つ可能性があるという事実から、今我々が置かれている状況がどれほど恵まれているのかがわかるでしょう。この環境は決してフツーではなく、あけぼので育つ子ども達にとって特別でスペシャルな経験だということを肝に銘じ、感謝の気持ちを持ち続けたいと思います。日々、多様な子ども達と生活できる日常にありがとう。

If the world were a village of 100 people
世界がもし100人の村だったら

池田書店 発行 文芸春秋 文芸春秋



※最後に「世界がもし 100 人の村だったら」という本を紹介させてもらっています。「我々日本人が考える多様性とは？」について考えさせられる本だと私は思います。5 分ほどで読めるので保護者の方々にも読んでいただければと思います。CoKii Lab.の2階にも置いています。

「私らしくあるために」

あけぼの保育園園長 影山 佳代

自分の長所や短所を聞かれたり考えたりしたことありますか？自分はどんな人なのか？意外と自分のことはわかっているようでわかっていなかったり、人から見た自分が当てはまっていたり当てはまっていなかったりします。そして、環境が変わるたびに様々な自分が登場します。

私が1年目か2年目の時の個人懇談会での出来事です。Aちゃんの様子を話す中で「Aちゃんらしい姿ですね」と何気なく発した言葉にAちゃんの保護者が「“らしい”とは具体的にどういう姿ですか？」と聞いてこられました。何気なく使っていた「らしい」という言葉に質問を投げかけられ一瞬“どきっ”としたことを今でも覚えています。それ以来、深く考えず発していた「らしい」という言葉を使う時は「何が“らしい”のか？」を考えるようになりました。と同時に「らしい」という言葉にはその人を決めつけてしまう要素も含まれているのではないか？と思うようにもなりました。Aちゃんの保護者はただ我が子の「らしい」の姿を詳しく聞きたかっただけだったのかもしれませんが、私はこの問いがずっと心の中に残っていました。

ある時娘に「ママ、自由にしたらいいのに」「その方が楽しいよ」と言われたことがありました。周りが気になり、自分の行動に言い訳をし、仮面を被る私の姿を見破ったのかもしれませんが。それも「私らしい」と言えばそうなのですが、言い訳を探して「らしい自分」になっていることが気になったのかもしれませんが。娘は、どんな時も自分がしたいことに周りを気にせず追求するタイプです。“私もそんな風に生きていけたらいいな”とわが娘ながら羨ましく思っていました。娘から言われた言葉が私の中で渦巻き、自分はできないと決めつけていること、したいのに周りが気になりしないこと、様々なことに理由をつけて本当は違う自分を出したいのに周りが思っている私になろうとしている私。娘の言葉で私の中の何かが少しずつ変化していきました。そして、Aちゃんの保護者が投げかけた「らしい」という言葉の重さ・意味を理解した気がしました。「らしい」という言葉は、他人に使うことでその人を決めつけていたのではないかと？そして、Aちゃんのお母さんも「うちの子の可能性を“らしい”という言葉で決めつけていませんか？」と私に問いかけてくれていたのかもしれないと思いました。

子ども達は、今感じている感情をありのまま出してくれます。不安や自信がない時は大人の顔を見て確認します。危険が伴わない時以外は「大丈夫！」「挑戦してみて！」と見守ります。

これから先、成長と共にありのままの自分を出して生きていくことが難しい場面に出会うかもしれません。1人ひとりが持っている「自分らしさ」を隠さないといけない場面に出会うかもしれません。だからこそありのままを出す今を全力で認め、そのことが心の奥底に残してくれていたら、きっとこれから先何があっても「自分らしさ」を忘れず生きていってくれと信じています。

余談ですが、先日「人はいつでも変化はできる。変化したいことに向かって少しずつ自分が行動していくと時間はかかっても必ず変化できる」と話していた人がいました。その方は60代。もう歳だから私には無理かもしれないなど勝手に自分を決めつけてしまわず、私も変化し続ける生き方であり、自分で決めた「私らしさ」を見せていきたいと思います。

おまけ・・・私は子ども達の前で家でしかない変顔をよくしています。子ども達は大喜びです。この変顔「自分らしく」ありたくても保護者には多分見せられない姿です。子ども達とだけの楽しみです。

『輪になって』を 読んで

昨年度発行した『輪になって～第44刊～』を読み、たくさんの感想をいただきました。
その中からいくつかの感想を紹介させていただきます。保護者の方からの心温まる感想、
ご意見、ありがとうございました。



入園のときにいただいた前年度の「輪になって」は、リビングの目立つところに置いておきながら、一度も目を通さずに1年が過ぎようとしていました。すみません。

今朝、なんとなく今年度の「輪になって」を読んでみると、保護者からの寄稿のページで朝から涙、涙。あけぼのの子ども達はみんな元気で、お母さん達もみんな優しそうで、毎日こんなに子育てに悩んだり、怒ったり、怒ったことを後悔したり、、、という日々を過ごしているのは我が家だけなんだろうなあ、と思いながら幼稚園に通った1年でした。でも「輪になって」を読むと、各家庭でいろいろな出来事があり、みんな悩むことがあるだなあ、私だけではないんだなあ、と思えました。

勢いで、前年度の「輪になって」も今日読みました。

どちらも素敵なエピソードが多く、ああ、今日も子どもとの時間を大切にしよう、と思えました。ありがとうございました。

こどもの送り迎えをしている中で、車椅子に乗る子どもを度々見ることがあり、輪になってを読んで恥ずかしながら初めて障がい児の受け入れを行っている事を知りました。

発達支援センターなどある中で、自分の暮らす地域にある保育園で個別性を持って関わり、でも集団の中でも共存し成長を促してくださる保育者さんがいるからこそなんだと読んでいてとても感動しました。

保護者さんの寄稿からも日々通う息子からも、園の方針、園児との関わりを書く、言うだけじゃなく実践してくれているんだなと実感しており小学生になるまでずっとこの園に通わせたいなと望んでいます。

感動で涙なしでは読めませんでした。

この園に出会えたこと、幸せです。ありがとうございます。

まもなく年少さんになりますが、わくわく楽しみ半分、これからどんな幼稚園生活になるのか不安も半分ですが、「輪になって」を読んで先生方の考え方はもちろん、保護者の方の考え方とっても素敵だなと感じ、あけぼので過ごす3年間がもっと楽しみなものになりました！私も余裕を持って子供を信じて、己育てができればいいなと思いました。

「輪になって」今回も読み終わって涙で鼻がぐずぐずです（笑）この涙がどんな感情の涙なのかい
つもわかりません。ただ、胸が締め付けられるような、あたたかくなるような一度に色んな感情が
溢れた涙です。

保護者の寄稿には、皆さん同じように試行錯誤して子供と向き合い、自分と重ね合わせて勇気の実
をもらえる気がします。私もまだまだ親として未熟で、周りに助けてもらい成長中です。でもこれ
でいいんだ。と思わせてくれます。

あけぼのの先生たちも、あけぼのの生き方の中で成長する子供たちにどうしてあげることが大切か
日々考えてくださり、それを実行してくれていま一緒に子育てをしている環境にとってもありがたく
思います。

「あけぼの子育て村」の村人になれて、みんながみんな育つこと！この素敵な村で子供と一緒に自
分らしさに自身をもって、素敵なところいっぱい見つけていきたいです！

冊子にも記載があった「健常やしょうがいと区切るのではなく、一人ひとりの得意不得意を把握し、
個性を大切にしていくこと」という言葉に、非常に共感しました。もちろんしょうがいに対して適
切な配慮は必要ですが、健常としょうがいの境目ってとても曖昧なものだと思います。

上の子の小学校はあけぼの出身の子も多いですが、授業で、個性のことを「持ち味」と表現してい
て良いなあと思いました。子どもの頃から相手をそのまま受け入れ高め合える環境は、得難い経験に
なっていると思います。

普段子育てをして、悩む事があるとどうしても視野が狭くなって、自分の中で解決してしまう
事が多いのですが、皆さんのお話を読んでみんな色んな悩みながら葛藤しながら子育てしてい
るんだなと共感する事が沢山ありました。

子供から教わる事、はっとする事が毎日沢山あります。

つつい自分の物差しで子供が出来る事、出来ない事を決めてしまったり、自分ならこうして
欲しいから子供もそうじゃないか、など子供と自分は別の人間という事をすぐ忘れては反省の
毎日でしたが、輪になってを読んでまた思い出し、自分で何でも選択できる環境を用意できる
様にしたいし、今のまま自己肯定感高めでのびのび育ててほしいなと強く思いました。ありが
とうございます！

編集後記

『輪になって』の発刊は今回で第45刊をむかえました。

今回は各リーダーがそれぞれのポジションの中で感じている思いや葛藤、伝えたいことをテーマに、各々綴りました。

日々子ども達と向き合っていく中で「この関わりでよかったのか」「子ども達にとっての最善って何だろう」と職員一同、考えを巡らせ、話し合ったり伝え合ったりしながら、さらに向上していこうとしている毎日です。それは保護者の皆様との関わりでも同じで、子どもを真ん中にして手を取り合ったとき、共に子ども達の幸せや成長を願って、意見を出し合っていける関係性でありたいと考えています。

子ども達との毎日にはすぐに見つかる成果や正解はなく、頭を悩ませることもあります。そのような時、ご縁があってこのあけぼので出会った私たち、あけぼの創立以来の教育・保育理念をもとに振り返ってみようというのが今年の輪になっての出発点でした。

『輪になって』は、在園時の保護者、そして職員による原稿を寄せ合い、編集したものです。寄稿していただいた保護者の方に心より感謝いたします。ありがとうございました。

『輪になって』を読んで感じたことや気付いたことを伝え合い、あけぼの子育て村で育つ子ども達・大人達がよりよく生きていけることを願ってやみません。

【障がい】の表記について

一般的には“障害”と書きますが【害】の文字は“悪くすること”“わざわい”という否定的な意味も含んでいます。これらの文字を使用することは人権尊重の視点からも好ましくないと考え、包括的保育を行うあけぼのとして【しょうがい】【障がい】【障碍】という表記で統一しています。

学校法人 あけぼの学園

安家 周一

編集委員

岡 優夏

宮脇 和華